

もくじ	続・千葉さなについて 1p	亀有大谷田物語② 3p
	都市近郊の農産物を追う 菖蒲② 3p	お知らせコーナー 4p

# 足立史談

第 号

200 年 月 15 日  
 足立区教育委員会  
 足立史談編集局  
 足立区立郷土博物館内  
 〒120-0001  
 東京都足立区大谷田5-20-1  
 TEL 03-3620-9393  
 FAX 03-5697-6562  
 < - >

明治 36 年毎日新聞掲載「千葉灸治院」図  
 画像については印刷物をご覧ください。

明治 36 年 10 月に発行された『毎日新聞』に掲載された千葉灸治院の挿絵。さながいたころの灸治院の姿を伝える。

四月号に掲載した話で反響が大きかったことと、誤った情報が流布していることを受け、足立区立郷土博物館より依頼を受けて続報を著すことになった。

そもそも千葉さなに関する情報については明治 36 年（一九〇三）に毎日新聞（現在の「毎日新聞」とは別の新聞社）に連載された「千葉の名灸」が詳しい。さな没後 7 年目に、当時存命だった千葉東（重太郎の養子）を取材した連載記事のため、鳥取県立博物館や東京都公文書館に所蔵史料や公文書と照合しても明治期においては信憑性が高い記事と考えられる。

そこで、今回は記事を紹介しつつ問題提起の意味も含め発表したい。

## 続・千葉さなについて ～千葉定吉家にまつわる誤伝について～ あさくらゆう

■「千葉の名灸」の記述  
 しかし「千葉の名灸」によると違う様相となる。さなは明治 4（一八七二）年に道場があつた桶町を離れ（後述）、明治 6 年（一八七三）には姉の住む横浜へ移り住み、今の中区長者町八丁目にあつた清正公堂（現在は同九丁目に移転）の前に長屋を建築し、家賃収入を得ていたとしている。

このとき知り合つた翁町河岸で薪炭問屋を営んでいた元鳥取藩士の山口菊次郎に求愛され、父定吉の反対を押し切つて結婚したとされる。この記事の要点部分を次に掲げる。

○千葉さなの技量や婚姻事象  
 さなの剣術の技量については前回述べたとおり史実であり、「千葉の名灸」で追記すれば「柄破き」と「白刃取り」を得意としたようだ。これらについては既に報じられている通り宇和島藩や越前藩へ長刀師範として指導したようだ。

そして通説では「生涯独身」を通したとして定着しているが、明治 26 年（一八九三）に『女学雑誌』で発表された記事では「未亡人」と紹介されているが、生涯独身の記述は存在しない。

では、いつからそうなったのか、これらは司馬遼太郎の「幕末のこと」（一九六四）で初出され、阿井景子の「龍馬のもうひとりの妻」（一九八五）で定着した。

■明治 36（一九〇三）年 「千葉の名灸」  
 （10 月 5 日記事より抜粋）  
 ……略……翁町の河岸に薪問屋を営み居たる山口菊次郎なる者あり。元やはり鳥取藩士にして、さな子が名をも聞き及び居たりしかば、その横浜に在るを幸い、人をもて結婚を申込みしに、さな子もようやく己が営業の寡婦に適せざるを悟りし折から、殊に龍馬が七周忌も済みたる後とて、遂にこれを請いて結納までも取り交わし、さて、父定吉の許へかくと言送りしに、昔気質の定吉は、もつての外と憤り、直ちに横浜に來りて、さな子を語り、其方の命は嘗て龍馬が靈前に捧げんとしたるものならずや、然るを今更何の面下げて他家に嫁がんとはする。況（ま）して人もあるべきに藩中にて、軽格の山口に行くとは何事ぞ、左でも強て行きたくば、この場に於いて龍馬に代わり、我が手に掛けて惜しからぬ。其方の一命絶ちくれんと、円（つぶら）の目を睜りつつ携へ來れる刀の鯉口早や徐々と寛ぐるに、さな子も今は当惑し、厠に上る振にてソツと裏口より抜出し、やはり鳥取藩の用達を勤め居たる串田八百吉なる者、当時、小形屋と云へる売込問屋を開きて兩仲通に住み、其妻女おふぢとは入魂の間柄なりしかば、取敢ず同家に赴きて一伍一什を告げ書き、分別を借（か）らんとせしに、八百吉夫婦も兼置がたく、まづさな子を隠まい置きて、段々定吉に詫び入り、今更故なく約束を反故にもしがたければ、是非に納得せられよと言葉を尽して仲裁せしにぞ、定吉も終に其顔に免じ、さな子を一旦串田が養女として山口方へ嫁がしめしは翌年（明治七・一八七四年）七月の事なりき。…略…

※ 「千葉の名灸」は同年 10 月 4 頁 6・10 日に掲載された。掲載にあたっては一部の句読点を追加するとともに、表記をあらためた。（編集）

記事内容の全てが事実かどうか、また、登場人物の实在性も裏付けの必要があるため鳥取県立博物館を訪れた。すると、同館に所蔵される「明治三年書送帳」に山口菊次郎が千葉定吉と併記される記述を発見したことにより元鳥取藩士であることを確認した。また、「贈従一位池田慶徳公御伝記」で同人が横浜に住んでいたことも確認できた（明治7・一八七四年四月三日条）。なお翁町河岸にあたる現横浜市中央区翁町一・一では明治中期においても薪炭問屋の存在が三軒確認できた。

**■鳥取藩士の实在確認** また結婚する際にいったん養女となった串田家についても「八百吉」ではなく「信太郎」として同様に实在が確認できた。この人物についても「千葉の名灸」が述べる屋号・住所・職業ともに一致しており、「贈従一位池田慶徳公御伝記」にも同様の記述が確認できる。

また戸籍についても「嶋根県士族千葉定吉二女」とあり、足立区へ転籍する以前に桶町とは違う場所に本籍があったことは明らかだ。なぜなら鳥取県は明治9（一八七六）年から明治14（一八八一）年まで島根県と合併しており、明治9年から14年まで同じ場所に本籍があったなら「鳥取県士族」に更正されるからである。

以上、記事の信憑性を検証すると、登場人物が実在したと確認できること、また千葉さんが山口菊次郎との婚姻関係を否定する材料は見出せなかったことから、現時点では千葉さんが、一時期にせよ結婚していたと推定する。

**○桶町道場の門人**

ところで通説となっている「千葉定吉（一七七〜一八七九）が開いた「桶町道場」だが、いままで明確な場所が解っておらず、今年の3月に中央区教育委員会は桶町道場を

「鍛冶橋通り（現八重洲二・八）にあった」とする案内板を設置した。しかし、「東京市史稿」や「諸願何届繰込」によると、案内板の場所は安政2年（一八五五）に焼失している。以後は桶町三十一番地（現八重洲二・四）に移転しており、この道場を「桶町道場」と呼んだのだ。つまり桶町でない場所を「桶町道場」と呼ぶわけもなく、案内板の設置は遺憾である。

なお、桶町道場は明治4年（一八七一）まで存在した。道場主である千葉重太郎が鳥取県へ出仕するため、道場経営ができなくなったために閉業している。

その後、道場は東京都公文書館所蔵の公文書によると千葉東一郎（千葉重太郎養子、千葉周作の庶子）に譲られ、同人の身上調査によれば道場は牛の飼育所となり、同所で牛乳販売を行っていたと記されている。なお、この屋敷も明治9年の大火で焼失した。

**○坂本龍馬の入門時期とさなの関係**

坂本龍馬が千葉道場にいたとする史料は非常に少ない。坂本龍馬が通年で小千葉道場にいたとする根拠は「長刀兵法目録」のみであり、実は坂本龍馬を有名にした「汗血千里駒」を含め、多くは千葉周作が経営する玄武館現千代田区東松下町）の門人としている。

また、清河八郎が記した「玄武館出席大概」（清河八郎記念館蔵）にも坂本龍馬の名前があり、この文書が嘉永年間に記されたことは山岡鉄舟が「小野鉄太郎」と記されていることと、坂本龍馬の江戸滞在期間から勘案すれば確定できる。

一説に小千葉道場の門人も含んだような記述をする御仁もいるが、小千葉道場の門人は末尾に少々いるだけだ。同道場の高弟で、徳島藩士の清水小十郎を筆頭に門人の多くが欠

落していることから、坂本龍馬は嘉永6（一八五三）年の時点では玄武館の門人ということになる。

よくよく考えれば千葉定吉が鳥取藩に「雇」（現在でいう非正規雇用）となるのは同年4月26日なので、土佐を出立前の時点で浪人道場である小千葉道場へ入門するのも不自然な話だ。つまり千葉さんと龍馬が深く関係するのは安政3年（一八五六）以降となる。

**結び**

急に脚光を浴びたことにより、千葉さんの人気は急上昇しているが、反面、史料の稀少性から、適当に書かれる場合や唯一草創期に先んじて調査し、その結果をもとに創作した阿井景子氏の小説を全て真実と決め付け、阿井氏に確認もせず、無批判に引用する研究家や、更にその文章を根拠として展開し、虚実が混在する内容のものも出ている。そのため初出の調査は困難を極めた。

ただ、結婚歴があるのが、千葉さんが坂本龍馬を愛していたことはすべての資料が認めている。

文久3年（一八六三・推定）に龍馬が坂本乙女（本来は「とめ」が正しい）へ送った書簡の内容も、「さな」についての問合せに対する龍馬の返答と窺えるため、坂本家が千葉さんに関して興味を抱く出来事があったのは事実であろう。

たとえ片思いではあっても「許婚」と語り、晩年のその心情は、現在多くのファンに深く伝わるものであろう。

**（歴史研究家）**

**■編集部より** 本稿は問題提起の一つとして掲載しました。今後の検証がまたれます。参考資料は郷土博物館で複写資料をご覧いただけます。なおコピー・撮影不可です。

**足立区立郷土博物館**



足立区立郷土博物館は、昭和61年に開館し、「東京の東郊」をテーマにした展示で平成21年にリニューアルオープンしました。肥溜め模型や木造都営集宅の復元など、近郊農村から、都心部の周辺地域として変化していった足立の歴史文化を紹介しています。

**交通のご案内**

【JR亀有駅北口から】東武バス 八潮駅南口行《足立郷土博物館》下車 徒歩1分・六ツ木都住行《東洲江庭園》下車 徒歩4分  
 【千代田線綾瀬駅西口から】東武バス 六ツ木都住行《東洲江庭園》下車 徒歩4分  
 『足立史談』は毎月教育委員会（郷土博物館）が発行し、郷土に関する歴史や民俗の研究、情報などを発信し、区内施設で無料配布しています。投稿された研究には、『幕府医師団と奥医師「青木春岱」』青木 昇著、『新撰組五兵衛新田始末』増田光明著など本にまとめたものもあります。今回の「続・千葉さんについて」の執筆者あさくら ゆう氏の投稿も『慶応四年新撰組近藤勇始末・江戸から五兵衛新田・流山・板橋まで』にまとめられています。また同氏の近刊に『慶応四年新撰組隊士伝』があります（いずれも『備書房刊』）

**郷土博物館の刊行物のご案内**

■平成16年特別展『幕末が生んだ遺産』  
 A4版88頁（七三〇円・送料一九〇円） 足立区域に訪れた新選組の資料と動きなど幕末動乱期の地域資料を紹介。

■平成18年開館二〇周年記念展『葵の御城』  
 光 A4版64頁（八〇〇円・送料一九〇円） 江戸時代の領主徳川將軍家とつながる資料を紹介。

亀有大谷田物語 第2回

昭和三〇年代の私

伊藤 純

〔町〕まち(その2)

■アメリカシロヒトリ その頃は、桜の花が終わり若葉になるとアメリカシロヒトリが大発生した。こいつはどんな葉っぱでも食う。柿の葉でも、垣根のやや分厚いテカテカした葉っぱでも、どんな葉っぱでも食うので、その季節になると町中がアメリカシロヒトリになる。シーズンに1回消毒がくる。1人で薬タンクを背負ってする小規模な作業では町中廻りきれないので、リヤカーに大きな薬タンクを載せて来た。薬を霧のような状態にして散布するのではなく、水の状態の木々に撒いていた。撒かれた消毒液がポトリ、ポトリと零になって落ちていたのを覚えていた。こんなに大量に発生するアメリカシロヒトリを有効活用できないかと考えた。どんな葉っぱでも食うということは、どこでもたやすく飼育できるということ。大量に飼育して、佃煮にでもしたらいいのではと、まじめに考えた。

■売り声 夏時分にはたまに金魚屋が来た。リヤカーにたくさんの水槽をのせて引いてくる。「きんぎよおーえ、きんぎよ。きんぎよおーえ、きんぎよ。」という売り声。家から飛び出して金魚を見に行く。金魚屋が前を通っても、金魚を買ってもらったことは一度もない。さお竹屋も来た。リヤカーに載せてきた人もいたが、縛った5・6本の青竹を担いで来る人もいた。「たけやー、さおだけ。」

底に穴が開いてしまった鍋の直し、骨が折れてしまった蝙蝠傘の直しもやって来た。はっきりとは覚えていないのだが、喉でつぶし

た声で「いかけー、こうもりがさのニユウ、ニユウ」と。ニユウ、ニユウの部分は意味のある言葉だったのだろうが、残念ながら私にはニユウ、ニユウとしか聞こえなかった。

■よいとまけ しばらく空き地になっていた所で「よいとまけ」がやられていることがある。建築工事に先立つ基礎工事。3本の丸太で4、5mの三角を組んで、三角の頂点に滑車をぶら下げ、重石(おもし)をつけたロープをこの滑車にとおす。ロープは長く、10人とまでとはいかなくても7、8人の人が並んでこのロープを引く。重石を三角の頂点まで引き上げ、一瞬のうちに落として、下にある杭を地中に打ち付けていく。この重石のロープを、力を合わせて効率よく引き、落とすための歌が「よいとまけ」。

「おとちやんのたつめなら、えーんやこおりや。もひとつおまけに、えーんやこおりや」という文句の掛け声を、皆で合唱しながら、「えーんやこおりや」の「りや」で皆がロープから同時に手を離す。そうすると重石は引力によって、地球の中心目指してストンと落下するといった具合。「おとちやんのたつめなら」という文句からも分かるように、「よいとまけ」の作業員はほとんどがおばさんだった。(大阪歴史博物館学芸員)

都市近郊の農産物を追う30

苜蓿 ②

荻原ちとせ

■苜蓿の栽培方法 苜蓿は、春になると芽が出て五月の出荷のころにはすでに六〇から八〇センチまで成長している。この間は、施肥と草取りがおもな仕事となる。とくに草取り

は、苜蓿を刈り取る際に混じってしまうのをさけるため、重要な仕事となった。苜蓿田には非常に根が張る強い草が生えやすく、よく草取りをしないと、苜蓿が草に覆われるようになってしまい、草取りのできなかった家は、そのまま苜蓿の出荷をあきらめるといようなことになるほどであった。田に苜蓿だけが生えているという状態しておくのが望ましい。

■水の調整 苜蓿は、夏期には水の豊富な方がよく成長するが、冬期には休眠状態になるので水田と同様に、用水路が閉じて水が来なくなっても大丈夫で、稲作と同様の水の管理でよかった。

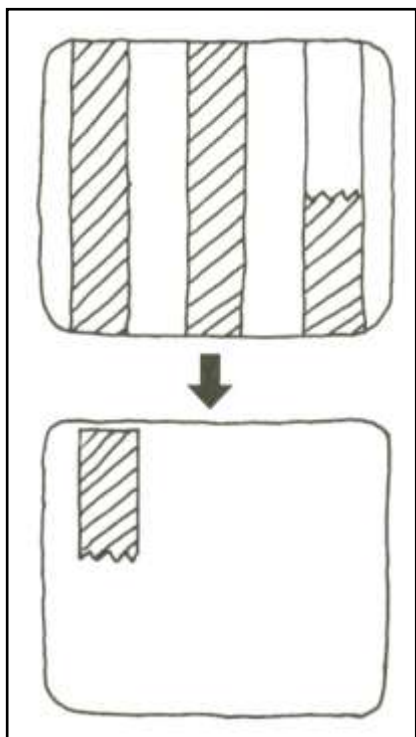
苜蓿の根元の色には青いものと赤いものがあるが、赤いものの方が喜ばれた。そのため、根元を赤く仕上げる必要があるが、収穫前には苜蓿田の水を切って日光によく当たるようにする。水の調節が容易なところでは、水を入れなくて根元に日が当たるようにした。このときに草が生えていると、日光が遮られて赤く仕上げる事ができない。このことから草取りをしておくことは重要であった。また、収穫のときには水気のない方が便利であるので、水を切る。

■冬の苜蓿田 節供にあわせてすべて刈り取ってしまったも、すぐに芽が伸び、八月にはもとの状態に戻る。晩秋になると、葉が枯れて春までは休眠状態となる。枯れた葉は翌年に苜蓿を刈り取るときに、引っかかって邪魔になるため、このころ刈り取って熊手で集めて焼却したり、面倒な場合は、田に火を点けてそのまま焼いてしまうこともできた。

■植え替え 苜蓿は、多年生の植物であるが、同じところにずっと生やしっぱなしにしておくより、何年かに一度に植え替えて活性化させるというものができた。植え替えによつて、草取りのときに取り損ねた雑草の根を絶やすことにもなった。

植え替えはだいたい五、六年に一度行う。苜蓿の根が田のなかでいっぱい張り巡らされているため、田を短冊形に分け、その間の根を、別の田に移植するように植え替える。こうすると、元の田の苜蓿も間引かれることになり、新しく根が伸びていく。

新しく植えつけられた苜蓿は、二、三年たつととも勢いよくなくなり、よい苜蓿が生えるようになる。しかし、五、六年目にはまた田の中が根でいっぱいになってしまう。こんどは、前回の元の田の方の苜蓿はとって片付



苜蓿の植え替え方法  
短冊形に分けて、斜線の部分を新しい田に植えてゆく。元の田でも白い部分が短冊形に残る。

けてしまいい何も植えられていない新しい新田にしてから移植させるのである。菖蒲田はどちらかという稲作には向かない田を使っているの、このように同じ田を移動するだけで、場所を次々と移動していくことはなかった。

■**収穫と出荷の準備** 菖蒲の収穫と出荷は、五月一日から四日までのほぼ四日間に集中する。菖蒲田のあまり広くない家では四日の一日だけで仕事を行う場合もあった。収穫はとくに難しい仕事ではなく、菖蒲田に入って、根元から刈り取る。刈り取ったものは適当な量で大きいたばねてワラで縛って田から運び出す。菖蒲田が道に面している場合には楽であったが、田に囲まれていて離れている場合は、重い菖蒲を持ってあぜを歩かなくては行けないので大変であった。

そのため、持っている水田が、他の田に囲まれて道から遠い家も菖蒲栽培をすることはできない理由となった。

また、菖蒲は稲と比べて重く、家に運んだあとに洗ったり、まるいたりする必要があるため、家から近い水田に作り、離れた遠方の田には作ることがなかった。

刈り取った菖蒲は根元についた泥をよく洗う。そして、握りくらくらいずつを、モチクサ(ヨモギ)をつけてまるき(結束し)これを一把とした。出荷するには、三〇把をひとまるきとして出した。

菖蒲につけるヨモギは、栽培したものではなく、付近の田んぼや水路の周りに自生するものをとって使う。ヨモギをとるのは、軽い仕事なので、田に入って菖蒲を刈ったり、運び出しをしたりする労働ができない、その家のお年寄りなどが行う仕事であった。

節供前の四日間に集中する仕事なので、家族のなかで、田で刈る人、洗う人、束ねる人などと分担して行う仕事であった。この期間

は一日中、朝から晩までかかりきりになり、他の仕事ができないくらい忙しくなるので「菖蒲は米より大変」というくらいであった。菖蒲田を持つ家でも、その年の気候によって小松菜やホウレン草などの出荷と重なってしまふこともあり、そんなときは菖蒲までは手が回りかね、菖蒲の出荷ができないということもあった。

■**花屋の切り出し** また、西新井の花屋が時機になるとやってきて、菖蒲を売ってくれというところもあった。これは、まだ田に生えているものを売る、いわゆる場買いということ、値段を交渉して場所を決めると、花屋が自分で刈っていくのである。

■**出荷** 出荷先は、日常野菜を出荷している市場にもっていく。入谷地域では、距離の近い美鴨や赤羽や岩槻の市場に持っていくことが多かった。重いものは牛車を使って運ぶ。自動車を使えるようになってからは、築地や神田の市場など、よい値がつく遠方の市場へも持っていく。

市場の値段については、他の野菜と同様に運んだあとは市場のシキリにまかせつきりで、値段についてはあとから「今年は高かった」とか「安かった」と認識する程度であった。ただし、「米より大変」ではあったが、「米よりはお金になる」ということもあり、短期集中の仕事で大変ではあったが、際物独特の面白さはあったという。

■**昭和末期の状況** 佐々木氏によると『足立史談』二〇八号、昭和六〇年、当時、菖蒲を栽培していた斎藤家、市川家の二軒は、それぞれ神田、築地の市場へ出荷している。斎藤家ではメネギ・タデなどのモノ栽培で、五月はその出荷も多く忙しい時期であった。また、区画整理により菖蒲栽培ができるかどうかの心配もされている。(郷土博物館学芸員)

### お知らせコーナー

#### くん蒸臨時休館のご案内

資料保存のための防虫・防カビ処理を行うくん蒸と館内消毒のため、左記の期間、臨時休館します。

▼期間 6月14日(月)～18日(金)

#### 父の日子どもイベント

#### 粹でいなせなeどっこoバッグ

紋きり柄のつかえるエコバッグを大切な人におくろう！ ▼日時 6月20日(日)午後2～3時 ▼定員 20名。対象、小学生以上。

▼申込み 電話にて郷土博物館まで。先着順。

#### 収蔵資料展

#### あそんでまなぶオモシロウきよえ

▼後期 6/19(土)～7/25(日) 二好評をいただいている「おもちゃ絵」浮世絵の展示会は、いよいよ後期の開催となります。変り種の浮世絵も新たに登場します。

#### 《浮世絵 関連イベント》

#### ▼浮世絵、ペーパークラフト

をつくる。浮世絵の複製を切りぬいて、小さな箱や金魚などを組み立てます。

▼日時 6月19日(土)午後2～3時 ▼定員 20名。

#### ▼申込み 当日博物館へ。

先着順。

#### ▼浮世絵DE☆砂絵職人

有名な浮世絵を砂絵でつくってみよう。 ▼日時 6月26日(土)午後2～3時。

#### 七夕関連イベント

#### ▼おうちにかざるミニ七夕飾りづくり

かわいい七夕飾りをつくりまします。 ▼日時 6月27日(日)午後2～3時 ▼定員 20名。対象、小学生以上。

▼申込み 当日博物館へ。先着順。

#### ▼ちよこつと七夕かざりづくり

博物館に七夕コーナーを設置します。博物館で七夕飾りに願いを託してみませんか。 ▼期間 6月29日(火)～7月11日(日)の開館時間中。 ▼場所 子どもホール。

#### ▼ミニ機械織りで織姫体験

いろんな使い方ができるつるし飾りをつくってみよう。 ▼日時 7月3日(土)午後2～3時 ▼定員 20名。対象、小学生以上。

▼申込み 電話で事前申込み。

歌川国利「新板せうきのだし組立」(左)。切り抜いて組み立てると江戸型山車が出る。

